



若手研究者・技術者の 学会参加促進について

井上 博文*

総務省がこの7月に発表した平成20年度情報通信白書によれば、わが国のこの10年間の主な産業の実質国内生産額(GDP)の推移は、建設では毎年数%減、輸送機械卸売、電気機械(除情報通信機器)、運輸、および小売ではほぼ横ばい、鉄鋼は微増である。これに対して情報通信産業は毎年10%近くの成長を遂げてきた。情報通信産業の総生産に占める割合は9.9%であり、全体でみると1%の成長への寄与であるが、GDP成長率が2.7%であることから、その寄与率は37%と大きい。実装技術に携わる者にとって、その糧となる電子機器は携帯電話、無線LAN機器、コンピュータ、光通信機器など、どれも情報通信機器であるから、われわれはわが国の成長をものづくりの面から支える担い手であると言っている。

情報通信産業との関係が深い学会は、電子情報通信学会(IEICE)であるが、近年、当学会、あるいはそのメンバへの協力要請が増えている。実装特集号の編纂依頼、あるいはMWE (Microwave Workshops & Exhibition, 今年は11月26日~28日、パシフィコ横浜にて開催)での実装セッションの協賛などである。

当学会への期待は、実は会員数の増加にも表れている。多くの学会では少子化とともに訪れた現役世代の減少が影を落とし、会員は確実に減少している。こうした中で微増ではあるが増えていることはその期待の大きさを示している。

「エレクトロニクス実装学会」の認知度はそれほど高くない。学生時代にこの学会を知ってもらい入会してもらえば、就職した後もそのままであることが多いだろう。私は、何とか学生に認知してもらいたいと考えて活動を続けてきた。たとえば、超高速高周波エレクトロニクス実装研究会では、早くから学生の参加費と予稿集配布を無料にしてきた。当初、前例がない、ただにすると何事ぞという意見もあったが、「ただにしたからといって来るのは10人程度で100人来ることはないだろう。そう大きな出費にはならないし、将来、学会にとって必ずプラスになる。」と説明しながら続けてきた。その結果、当研究会への学生の参加者、発表者が増え、これらの方々の大会行事への参加につながってきている。

若手の参加は古手の参加に良い影響を与える。学生の研究者が発表する際にその指導教授が積極的に参加することも挙げられるし、何より、企業側の管理職の参加者が増える。聞けば、企業の管理者は新しい技術を求めて来ること半分、優秀な人材を探しに来ること半分とのことである。お世辞かもしれないが、某大学教授からこの研究会で発表した学生の就職内定率は100%以上(複数の内定が出ることもあるため)との嬉しい話をいただいている。学会にとっても参加する学生にとっても得るところが大きいのである。

今年度、新たな試みとして、電子情報通信学会と共催の若手研究者発表会にJIEP賞を出すことを申請し了承を得て、7月に論文発表1件を表彰した。来年度はJPCAショー併設の最先端実装技術シンポジウムや公開研究会と合わせて、35歳以下の発表者を集めた若手研究者発表会を開催する案を考えている。また、講演大会のイベントの1つとして、横浜実装技術コンソーシアム(YJC)の協力を得て、若手の教育を目的としたチュートリアルセッションを開設することなどについても具体化を検討している。

実装はものづくりに直結しており、種々の条件を振って得た経験値がものを言う。一般解が得られにくい場合、実際にやってみて実証するということが必須である。現場離れが実装技術の危機を招くことは明らかである。経験豊富な古手の方々に実践講座の開催などを担っていただき、若手の育成にご協力願いたい。若手と古手が刺激しあうことでエレクトロニクス実装学会の新たな一歩が踏み出されると確信している。